

令和7年度 AIE国際高等学校 学校評価総括表

教育目標	高い問題意識と感性を有する若者を受けとめ、自国の文化・歴史に誇りを持ち、広く世界に関心の目を向けて社会の問題に気づき、それを解決しようと努力する熱意と能力を持つ使命感溢れる国際人を育成する。(学則第1条)
目指す学校像	豊かな感性をもった若者が新しい自分を発見し、広く世界に貢献しようとする意欲と能力を開花させる学校。
Learner Profile (目指す生徒像)	
Knowledgeableー知性ー	広くバランスのとれた学問領域について理解と知識を深めようとする人
Harmoniousー協調性ー	自分の意見を持ちながら、他者の意見も尊重し、協力し合いながら効果的にものごとに取り組める人
Risk-Takerー挑戦ー	困難や、不確実性に勇気をもって臨むことができる人、自分の信念を恐れずに明言し実践できる人
Balancedーバランスー	体と心のバランスを重視し、肉体も人格の一部として大切にすること
Sensibleー感性ー	目に見えないものを感じ、それに価値をおき、理解することよりも、信じることに重きをおける人
Resilientー再起力ー	困難な状況の中でも、何らかの前向きな意味を見出す気質を持っている人
Caring & Humbleー他者配慮ー	思いやりと謙虚さを持った人、他者の気持ちに共感し、慈悲の心を持つ人
Self-Determiningー決断力ー	課題、問題に真摯に向き合い、真剣に考え自己決定ができる人
基本方針	
①学び合う	教える者は学ぶ者。学ぶ者は教える者。この精神のもと、生徒と先生が一緒に校風を創ります。先生は師であるとともに、同じく人間として成長しようとする友です。
②コミュニケーション能力を育てる	コミュニケーションとは、“人と関わること”。相手の気持ち、メッセージを正しく受けとめ、また、自分の思いを分かりやすく表現し、対話を深めていく力を育てます。そのために、母国語を基盤とする“言葉の力”を大切にします。
③多面的にチャレンジする	色々な自分を発見するために、様々な分野にチャレンジします。スポーツ・音楽・絵画・ガーデニング・茶道・演劇・討論 etc. 多彩な活動、イベントを通して新しい自分に出会います。
④国際的志向を高める	グローバルな時代にあって、広く世界に関心の目を向け、“国際社会の一員になろうとする気持ち”を育てます。母国語をしっかりと理解しながら、異なる国との関わりを学ぶ能力を高めるのが目標です。
⑤悩む力・考える力・乗り越える力	“悩むべきことに悩む”のは能力です。その感性を大切にしながら、その問題から逃げずに考え続ける力、そして、それを乗り越えていく力を育てます。問題に気づき、解決していく、強く柔軟な心の姿勢を育てます。
⑥基礎から始める	嵐が来ても根がしっかりとした木は倒れません。何事においても、しっかりとした基盤があってはじめて応用力を発揮することができます。特に学習面においては、基礎からていねいに学ぶことを大切にします。
前年度の課題と評価	教育理念: 令和6年度は、学習者像「Learner Profile」の実践を、オリエンテーションや学校行事、部活動での目標設定・振り返りに加え、新たに哲学カフェやスピーチコンテスト「克己」を通じて深化させた一年であった。国際バカロレアの取り組みが他校との連携を通じてさらに深化し、教員研修による専門性向上も進んだ。一方、国際情勢の変化により体験留学や海外進学に慎重にならざるを得ない状況が増えることが懸念されており、引き続き広い視野を持った国際人育成に取り組むことが課題である。 教育活動: 英検等資格取得の3年間計画表の配布や特別アート講座の実施等によりカリキュラムの充実を図り、淡路島の地域資源を活かした探究学習やサッカー部の県大会準優勝など、課外活動も充実した一年であった。進路指導では、海外指定校の拡充(モナッシュ大学等3校)や関西大学教授による模擬授業、留学フェアの開催などにより、生徒が多様な進路選択を検討できる機会を提供した。一方、所属コースに関わらず課外活動へ参加できる機会の拡大や、偏差値・評価にとどまらない一次産業を含む社会貢献の視点を持てる進路指導の充実が、引き続きの課題として挙げられている。 学校としての体制の確立: 教職員の増員(非常勤2名、事務職員3名)により生徒数増加に対応するとともに、寮運営に関する危機管理マニュアルの見直し・改訂を行うなど、安全管理体制の強化に努めた。地域との連携では、阪神・淡路大震災追悼行事への参加やNPOと協働した海岸清掃活動、サッカー部の地域貢献活動など、多様な形での交流を継続した。一方、生徒数増加に伴う教職員体制のさらなる充実や、自然災害の頻発化を踏まえた継続的な危機管理の徹底が、引き続きの課題である。

学校自己評価(令和8年6月15日実施)			学校関係者評価 (令和8年6月27日実施)	
評価項目	評価		評価(結果・分析)及び意見等	
	項目	総合		
教育理念				
理念の浸透	A	A	A	生活のあらゆる場面を通して人格教育を目指す教育理念が、学習者像「Learner Profile」として明確に位置づけられている。学期開始時のオリエンテーションや学校行事、部活動などの課外活動を通して、生徒自身が目標設定・実践・振り返りを行い、理念の原点に立ち戻りながら自らの成長を自覚できる取組になっている点は高く評価できる。通信・オンライン生に対しても、集中スクーリング時に「Learner Profile」を共有し、AIEで学ぶすべての生徒に理念を育む指導がなされていることは特筆すべき点である。オンライン生や通信生、週1通学生にも理念がより一層浸透するよう、引き続きの取組を期待したい。 理念の実践の場として、IBの実践発表会や「ボランティア+αクラブ」による防災に関する課題発見・解決の取組、英語演劇や短期留学、在大阪オランダ領事館の訪問など、多様な学習の場が設定されている。生徒たちに国際的な視野を持たせるとともに地域での活動にも目を向けさせる機会を多く取り入れ、そこで生徒一人ひとりが得た気づきを丁寧に拾い上げ、発表の場を設けることで、生徒同士の視野の拡大や学習・進路へのモチベーション向上にもつなげている。IB生も年々増加しており、学校の理念の高さがうかがえる。 伝統的な英語劇発表会やガーデニングといった活動は、教育コミュニティの絆を育む機会となっており、保護者有志による「ファミリーの会」と学校との交流の場としても機能している。学校に関わる多様なコミュニティとの連携が深まっていることは、教育への理解が着実に進んでいることの表れであり、今後さらに深化・発展していくことを期待したい。
理念の実践	A		A	
国際性の涵養	A		A	
学校コミュニティーの発展	A		A	

教育活動				
カリキュラムの充実	A	A	普通科・国際科ともに、進路希望に合わせた4つの履修モデルから科目を選択できる体制を整え、大学進学に有効なカリキュラムを編成した。単位認定外の通学の英語科目の授業では、従来の学年別からレベル別授業へと移行し、生徒一人ひとりの能力に応じた指導を実現した。また、実力を客観的に把握するため模試や英検模試を定期的に実施した。国内大学入試で重要度が増す英検とその他資格試験については、受験での活用方法と、3年間の資格取得計画表を配布の上、各自で考える時間をつくり、長期的な英語力向上の意識喚起を図った。	A
課外活動の充実	A		淡路島という立地を活かしつつ、生徒の視野を広げるため「大塚国際美術館」や「万博」への校外学習を実施し、歴史・文化や国際的視点に触れる機会を充実させた。また、スポーツ大会等の学校行事を開催し、生徒同士の協調性を育んだ。部活動においては、サッカー部が日々の練習に励みインターハイ兵庫県大会準優勝という記録を残した。和太鼓部も応援や舞台での演奏に向けて研鑽を積むなど、生徒が目標に向かって精力的に活動した。 なお、多様な学習スタイルへの配慮として、オンラインで実施・配信可能な行事については、オンライン生や通信生にも広く参加希望を募り、積極的な呼びかけを行った。学びの形態に関わらず、より多くの生徒が一体となって課外活動に参加できる機会の提供を心がけた。	
個別サポートの充実	A		生徒の多様なニーズに応じた個別サポートとカウンセリング体制の充実を図った。通学生・寮生には「アカデミックカウンセリング」と「学期末面談」を通じた指導を展開し、自律的な学習・生活習慣の定着を支援した。通信生・オンライン生にはスクーリング時の個別面談で進路指導等を行い、柔軟なサポート環境をつくった。さらに教職員向けの定期研修によりカウンセリング能力を底上げし、学校全体で生徒を支える体制づくりに努めた。	
カウンセリングの充実	A			
進路指導の充実	A		コースを問わず3年生に対して進路面談を実施し、きめ細かなサポートを行った結果、卒業生の95%が進路を決定した。また、大学入学者の半数以上が総合型選抜や学校推薦型選抜などの年内入試を利用する現状を踏まえ、1年次からそれらの入試制度や必要事項に関する早期指導を行った。加えて、各大学の年内入試情報を集約し、ライブラリー(図書室)や掲示で生徒が常時閲覧できる環境を整備した。国内外に視野を広げる取り組みとして、海外大学の広報担当者を本校に招き、海外進学も進路のひとつとして考える機会をつくった。このような多角的な進路指導の成果として、国際基督教大学(ICU)、慶應義塾大学、上智大学など、国内トップレベルの大学へ合格する生徒も輩出している。	
保護者との連携	A		保護者との緊密な連携を図るため、電話やメールに加え、学習支援ツール(Classi)を日常的に活用し、情報共有に努めた。学期末面談においてはオンライン形式を活用した結果、遠方の保護者も参加が容易となり、対象者のほぼ全員との実施に至った。どのコースでも生徒の状況に応じてオンラインや電話面談を行い、保護者と連携した生徒のサポート体制を構築することを試みた。	A

学校としての体制の確立				
適切な教育課程の編成	A	A	教育課程は、内閣府に認定された特区計画申請書および、文科省に確認された教育課程表に従って適正に編成している。なお、2022年度入学者より新学習指導要領の施行にともない、本校でも新課程で各教科を実施した。また、普通科・国際科ともに、進路希望に合わせた4つの履修モデルから科目を選択できる体制を整え、年度末に進路希望調査を行い、国内・海外大学進学の様々な選択肢に対応できるようにした。	A
適切な面接指導・添削指導等	A		面接指導・添削指導等は、学習指導要領及び学校教育法、その他関連法、高等学校通信教育の質の確保・向上のためのガイドラインに則って実施した。	A
適切な教職員の配置と組織運営	A		適切な教職員の配置と組織運営については、少人数クラスを維持して教育の質を高めるように努めた。添削指導のための教員を含む非常勤の教職員を4名増員し、生徒数の増加に対応した。	A
危機管理について	A		危機管理体制については、文部科学省のガイドラインに準拠し、本校の危機管理マニュアルの随時更新を行っている。また、定期的な施設・設備の点検を行い、安全な教育環境を維持に努めた。寮運営における危機管理マニュアルの見直しと改訂を実施し、総合的な安全管理体制づくりに努めている。	A
学校評価の実施	A		本校の教育活動に関する情報提供として、ホームページやSNSを通じた定期的な活動報告を実施している。在校生および保護者に対しては、学習支援ツール(Classi)を活用し、連絡が双方向にできるようにしている。それにより、保護者からの意見等を的確に把握し、学校運営や日々の教育活動の改善へと反映させている。	A
適切な情報提供と意見等の取り入れ	A			A
地域との連携	A		様々な形で地域社会と深く連携し、交流の機会を設けた。阪神・淡路大震災の追悼行事には、本校有志が積極的に参加し、地域の歴史や祈りに触れる機会となった。また「ボランティア+αクラブ」の生徒が中心となり、淡路市防災課でインタビューを行った。震災時に救助活動を経験された方を招き、生徒自らが「防災講話」を企画・実施して地域防災の重要性を学んだ。さらに、継続参加しているNPO主催の海岸清掃活動では、学生運営委員として当日の司会等の役割を担った。加えて、和太鼓部が淡路市内で開催された「Beauty Japan瀬戸内大会」の開会で演奏の機会をいただいた。また、当該年度もサッカー部は島内での貢献活動を年間のプログラムに組み込むことで、継続的に地域と関わる仕組みを構築し、社会貢献への意欲を高めている。	A
適切な施設及び設備の整備	A		法令に適合した敷地面積、教室等が確保され、必要な点検等も適切に行った。	A